

羅生門

芥川龍之介

本文：青空文庫（入力：平山誠、野口英司／校正：もりみつじゅんじ）

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

ある日の暮方の事である。一人の下人^{げにん}が、羅生門^{らしやうもん}の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗^{にぬり}の剥^はげた、大きな円柱^{まるばしら}に、蟋蟀^{きりぎりす}が一匹とまっている。羅生門^{らしやうもん}が、朱雀大路^{すざくおおじ}にある以上は、この男のほかに、雨やみをする市女笠^{いちめがさ}や揉烏帽子^{もみえぼし}が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない。

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震^{つじかぜ}とか辻風^{つじかぜ}とか火事^{わざわい}とか饑饉^{きうきん}とか云う災^{わざわい}がつづいて起った。そこで洛中^{らくちゆう}のさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎^{うちくだ}いて、その丹^にがついたり、金銀^{はく}の箔^{はく}がついたりした木を、路^{みち}ばたにつみ重ねて、薪^{たきぎ}の料^{しろ}に売っていたと云う事である。洛中^{らくちゆう}がその始末であるから、羅生門^{らしやうもん}の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸^{こりす}が棲^すむ。盗人^{ぬすびと}が棲^すむ。とうとうしまいには、引取り手のない死人^{しにん}を、この門へ持って来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪るがって、この門の近所へは足ぶみをしない事になってしまったのである。

その代りまた鴉^{からす}がどこからか、たくさん集って来た。昼間見ると、その鴉^{からす}が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾^{しび}のまわりを啼きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻^{ごま}をまいたようにはっきり見えた。鴉^{からす}は、勿論、門の上にある死人^{しにん}の肉を、啄^{ついば}みに来るのである。——もっとも今日は、刻限^{こくげん}が遅いせいか、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉^{ふん}の糞^{ふん}が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺^{あお}の襖^{あお}の尻^{しり}を据えて、右の頬^{きび}に出来た、大きな面皰^{めんぽ}を気にしな

がら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと言う当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微^{すいび}していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と言うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」と言う方が、適当である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。申^{さる}の刻下^{こくさが}りからふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、下人は、何をおいても差当^あり明日の暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあっと云う音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した藁^{いらか}の先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでいる^{いとま} 違はない。選んでいれば、築土^{ついに}の下か、道ばたの土の上で、饑死^{うえじに}をするばかりである。そうして、この門の上へ持って来て、犬のように棄てられてしまうばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道^{ていかい}を低徊^{あげく}した揚句に、やっこの局所^{ほうちやく}へ逢着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「盗人^{ぬすびと}になるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずに

いたのである。

下人は、大きな嚏くさめをして、それから、大儀たいぎそうに立上った。夕冷えのする京都は、もう火桶ひおけが欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗にぬりの柱にとまっていた蟋蟀きりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。

下人は、頸くびをちぢめながら、山吹やまぶきの汗衫かざみに重ねた、紺あおの襖うすの肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風うれえの患うれえのない、人目にかかるおそれの惧おそれのない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗った梯子はしごが眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄ひじりづかの太刀たちが鞘走さやばしらないように気をつけながら、藁草履わらぞうりをはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子ようすを窺っていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚うみの中に、赤く膿にきびを持った面皰めんぽうのある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高くくを括くくっていた。それが、梯子を二三段上って見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと動かしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮やもりのように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平たいらにしながら、頸のどを出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗いて

見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸^{しがい}が、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だと云う事実さえ疑われるほど、土を捏ねて造った人形のように、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上のころがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影を一層暗くしながら、永久に唾^{おし}の如く黙っていた。

下人^{げにん}は、それらの死骸^{ふらん}の腐爛した臭気に思わず、鼻^{おほ}を掩った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからだ。

下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に蹲^{うずくま}っている人間を見た。檜皮色^{ひわだいろ}の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭^やの、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片^{きぎれ}を持って、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時^{ざんじ}は呼吸^{いき}をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身^{とうしん}の毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱^{しらみ}をとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖

が少しずつ消えて行った。そして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。――いや、この老婆に対すると云っては、語弊ごへいがあるかも知れない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さっき門の下でこの男が考えていた、饑死うえじにをするか盗人ぬすびとになるかと言う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、饑死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のように、勢いよく燃え上り出していたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であった。勿論、下人は、さっきまで自分が、盗人になる気でいた事などは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上った。そうして聖柄ひじりづかの太刀に手をかけながら、大腿に老婆の前へ歩みよった。老婆が驚いたのは云うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩いしゆみにでも弾かれたように、飛び上った。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸ふさにつまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、こう罵った。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、はじめからわかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ扭ねじ倒した。丁度、鶏にわとりの脚のような、骨と皮ばかり

の腕である。

「何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘^{さや}を払って、白い鋼^{はがね}の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼を、めだま^{めだま}まぶた^{まぶた}の外へ出そうになるほど、見開いて、唾^{しゅうね}のように執拗^{しゅうね}く黙っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後^{あと}に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう云った。

「己^{おれ}は検非違使^{けびいし}の庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄^{なわ}をかけて、どうしようと云うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居たのだから、それを己に話しさえすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じっとその下人の顔を見守った。睚^{まぶた}の赤くなった、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、ほとんど、鼻と一つになった唇を、何か物でも噛んでいるように動かした。細い喉で、尖った喉仏^{のどぼとけ}の動いているのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くような声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わって来た。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬘^{かづら}にしようと思うたのじゃ。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑^{ぶべつ}と一しよに、心の中へはいって来た。すると、その気色^{けしき}が、先方へも通じたのであろう。老婆

は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、墓^{ひき}のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を云った。

「成程な、死人^{しびと}の髪^しの毛^げを抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇^{しすん}を四寸ばかりずつに切って干したのを、干魚^{ぼしうお}だと云うて、太刀帯^{たてわき}の陣^いへ売りに往んだわ。疫病^{えやみ}にかかって死ななんたら、今でも売りに往んでいた事である。それもよ、この女の売^さる干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、欠かさず菜料^{さいりょう}に買っていたそう。わしは、この女のした事が悪いとは思^{おも}うていぬ。せねば、餓死をするのじゃて、仕方がなくした事である。されば、今また、わしのしていた事も悪い事とは思^{おも}わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするじゃて、仕方がなくする事じゃわいの。じゃて、その仕方がない事を、よく知っていたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるである。」

老婆は、大体こんな意味の事を云った。

下人は、太刀^{さや}を鞘^さにおさめて、その太刀^{つか}の柄^{つか}を左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬に膿^{にきび}を持った大きな面皰^{めんぽう}を気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いている中に、下人の心には、ある勇気が生まれて来た。それは、さっき門の下で、この男には欠けていた勇気である。そうして、またさっきこの門の上へ上って、この老婆を捕えた時の勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である。下人は、餓死をするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、餓死などと云う事は、ほとんど、考える事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されていた。

「きっと、そうか。」

老婆^{おわ}の話が完ると、下人^{あざけ}は嘲^{あざけ}のような声で念を押した。そうして、

一足前へ出ると、不意に右の手を面^{にきび}から離して、老婆^{えりがみ}の襟上をつかみながら、噛みつくようにこう云った。

「では、己^{おれ}が引剥^{ひはぎ}をしようと恨むまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった櫓^{ひわだいろ}皮色の着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這って行った。そうして、そこから、短い白髪^{しらが}を倒^{さかさま}にして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方^{ゆくえ}は、誰も知らない。

(大正四年九月)